

令和3年度の水泳指導

校長 藤田 忠久

5月19日（水）の朝、岐阜大学保健体育講座大学院出の初任者に「県教委がコロナ下でも水泳可とした理由を、水泳の専門でゼミの恩師でもある岐阜大学の春日先生から探ってきて欲しい。」と依頼したところ、翌朝「昨日の退勤後に春日先生のところに行ってきました」と、教育雑誌「体育科教育」6月号（最新号）に組まれた「水泳の授業、どうする？」の特集を参考にするように伝達されてきました。

そこで、まずはその中から、心に残った文章を順不同で少し紹介をします。

<編集部の視点>

令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、多くの学校で水泳領域の授業が中止となった。やむを得ない判断だったとしても、学習指導要領に必修として位置付く運動領域が「中止」となった事実を、注意深く検討する必要がある。

<学校教育に水泳領域が必要な理由>

第一に「自らの命を守る術を身に付けること」である。日本は周囲を海に囲まれ、河川や湖も多く、水と関わらずに生きていくことができない。水害や水難事故で多くの命が奪われている現実もある。第二に、生涯スポーツに繋がる資質・能力の育成として「近代泳法を習得すること」であろう。二つの理由をまとめると「水中での身のこなし方を学ぶこと」が、現在の水泳領域に求められていること。

<感染リスクの考え方（水泳実施上の留意点）>

プール外で特に問題になるのは更衣室の使用法で「3密」回避のために文科省は「3㎡に1名」を目安としている。マスク着用を原則とし「マスクを外したら会話回避」を徹底する。プール内では、バディシステムでの安全管理でも極力会話や接触を避け、エアタッチやハンドサイン等の活用を工夫する。教員は、飛沫感染を予防するために、水中においてもマスク着用（マウスシールドとの併用）を考える。また、プールの遊離残留塩素の濃度を常に基準値に保たなければならない。

<約2年間の空白への留意点>

運動強度が高くなり、疲労が蓄積すると免疫機能が低下し感染リスクが高まるため、例年よりも指導目標を下げ、負荷が大きくなるように授業を進める。初回の水泳授業は、どの学年も「水慣れ」をしっかりと行い、「水に親しむ」ことからスタートする。

また、日本スイミングクラブ協会のガイドラインには「プールにおいては、水を介した感染リスクは極めて低いと考えられているが、遊泳プールでの密な状態で大勢が戯れている場合は、会話や接触による感染リスクが高まる。」という基本方針が示されています。

そこで岐阜小学校では、泳ぎを身に付ける学童期に2年連続で水泳をしないことのリスクの大きさを鑑み、これらのことを踏まえ、感染対策を徹底するよう事前指導を重視し、

令和3年度「水泳学習」は、下記のような方法で実施することとする。



- ・ どの学年も無理をさせず「水に親しむ」指導に徹する。
- ・ プールサイドでは、両サイドに広がって2mの間隔を保つようにする。
- ・ プールは、25mの一方通行を基本に、間隔を空けて利用して感染リスクを避ける。
(低…小プール、中・高…大プールをコースロープで仕切り、じっくり:1,2コース、通常:4,5コース、どんどん:3コース)
- ・ 安全確認（見届け）は、前半の12.5mと後半の12.5mを教員で分担する。
- ・ 2～6年生は学年で一緒にプールを利用し、1年生は授業（2時間目or3時間目）45分と中休み15分の合計60分間を、30分ずつの前後半交代制で使用するとし、学級毎に担任とハートフルサポーターのTT指導とする。